アンナとグレン　Anna Lee: A nice ending story *by Ballpusher69*

高校時代のことだ。

サイエンスのクラスにアンナ・リーという、背が高く、ケイト・モスのように細い、それ以外にこれといって特徴のない少女がいた。顔だちは平凡で、胸も控えめだった。

ひどく気難しい、感情の起伏の激しい娘だった。物事がうまくいかないと、ひどく乱暴になるのだ。他の女の子の髪の毛を引っ張り、頬に平手打ちを食わせたり、ときには、その股間に膝蹴りを浴びせたという。股間に、だ！

女の子だけじゃない、体育の時間、彼女は難癖をつけては、男の子の睾丸を蹴り上げた。ある時ぼくは、彼女に睾丸を蹴られた男の子が、みな、睾丸が大きいことに気づいた。クラスメートの睾丸の大きさは、体育の後のシャワーを浴びるときに全裸になるので、知っている。

彼らは、シャワールームでお互いの睾丸をふざけて見せあっていたし、その噂はクラス中に広まる。彼らのガールフレンドから情報が伝わることもある。

グレンという男の子が、南部の小さな町から転校してきた。典型的な南部の田舎者だった。髪の毛はもじゃもじゃ、身長は１９０センチ近く、胸板は厚く、体重は１００キロ近くある大男だった。ひどい照れ屋で、一人でいることが多かった。

ある日、体育の時間の後、更衣室でぼくは、ふとグレンがお尻をこちらに向け、上半身をかがめたのに気づいた。彼の脚と脚との間から、睾丸がふいに顔を出した。

とてつもなく巨大な睾丸だった！

小さなレモンか、大きめの卵くらいの大きさだった。その巨大な玉を収納している玉袋は、鳥の皮のように分厚く、まるでミニサイズのアメフトのボールだった。

彼は立ち上がり、玉袋は再び引っ込んだ。ぼくは急いで服を脱ぎ、シャワールームに向かった。隣でグレンがシャワーを浴びていた。そっと盗み見ると、巨大な玉袋が股間に、プラムを二つ入れたビニール袋のようにぶらさがっていた。ペニスは縮んでいたが、やはり同様に太いようだった。皺だらけの皮が、紫色の亀頭をそっと覆っていた。

タオルで体を拭き、服を着ると、ぼくは次の授業に向かった。サイエンスのクラスだ。

グレンも出席していて、アンナと、実験のパートナーを組むように命じられた。二人は気が合ったようだ。

数週間後、もうそろそろ、アンナも、グレンの巨大な睾丸についての情報を得たころだろうと思われた。ちょうど、ぼくは金曜日に開かれるパーティに招待されていた。ぼくは授業中、グレンに、君もいくかい？　と訊ねてみた。彼は、行く、と答えた。

次にぼくは、アンナに訊ねてみた。その際、グレンも出席することを仄めかした。彼女は、間

髪入れずに答えた。

「それはぜひ、いきたいな！」

パーティが始まったのは午後7時、１０時にはほとんどの出席者はへべれけだった。テーブルには、だれが呑んだか分からない、安いビールや安ウィスキー、ウォッカのソーダ割りのグラスが並んでいた。

出席者たちはふざけあったり、カウチやベッドルームや前庭で抱き合ったりしていた。

グレンが到着したとき、アンナはキッチンで何人かの友人と喋りあっていた。彼女らはアンナを、二階で二人きりになれば、とそそのかした。

アンナは頷き、やがて二人の姿はひとつのベッドルームに消えた。

ぼくは、アンナがあの田舎者の巨大な睾丸をどうするつもりなのか、興味を抱いた。そこで、アンナの友人の一人（キュートなブロンドの子だった）に、二階に行ってみようよ、と提案した。

ぼくらは、ベッドルームを一部屋ずつ覗いてまわった。そして、ついに二人の居場所をつきとめた。

そっとドアを開けて覗くと、彼らはベッドにあぐらをかき、酒を飲みながらお喋りしていた。ぼくらは足音を忍ばせて部屋に入り、物陰に隠れた。

アンナとグレンは、お互いの秘密の妄想を打ち明けあっていた。
アンナが、「あんた、すごく大きいのもってるんだってね」と蓮っ葉な調子で言い、「見せてよ」と彼の股間を撫でた。
グレンは真っ赤になってもじもじした。アンナは、彼がもし全裸になって逸物を見せてくれたら、それを自分のプッシーに入れさせてあげてもいい、とまで言った。
グレンは、目を輝かせ、ズボンを脱いだ。アンナが驚いたように咳き込んだ。
彼女の目の前に、巨大な睾丸がさらされた。
かつて、シャワールームで初めてそれを目撃したときのぼくのように、彼女は目を見開いていた。
彼女にとっても、いまだかつて見た事もない巨大さだったに違いない。
アンナは両手を伸ばし、片手に一つずつ、グレンの睾丸を握り、優しくマッサージした。
そして、彼をベッドに押し倒し、彼の股間にまたがり、彼の怒張した逸物を握りしめ、自分のプッシーに導いた。彼のペニスの先端は、彼女の股間からしたたる愛液で濡れていた。
彼女は、彼女の手の中で大きくなった彼のペニスを見て、悲鳴をあげた。それはまるで、ジャンボサイズの瓜のようだったのだ。

アンナは何度も、挿入しようと試みた。だが、それは大きすぎて、なかなか彼女の入り口には入りきらなかった。
彼女はついに諦めた。ペニスから手を離し、ベッドから下りようとした。
するとグレンは欲求不満を顔にみなぎらせ、出て行こうとする彼女の髪の毛をつかんで言った。
「なにか問題があるのか？」
アンナは、彼の乱暴さにうろたえ、
「大きすぎて、入らないのよ」
と言った。
「約束したろ！」
グレンは、もう一度、さっきの行為を続けるよう強要した。
ふと、アンナの顔に、何かが閃いたような表情が浮かんだ。彼女は、再び仰向けに寝そべる彼の股間にまたがり、両手で一つずつ彼の睾丸をつかみ、掌のなかで転がしはじめた。
グレンは右手で自分のペニスをつかみ、彼女のプッシーに押しつけた。そしてぐいと挿入した。
アンナは苦痛に顔をゆがめた。グレンはお構いなしに、ペニスをさらに深く挿入しようとした。
そのとき、彼女は両手に握りしめた睾丸を、強く圧迫した。
「ぎゃあああ！！！」

グレンは悲鳴をあげてのけぞった。
「どうしたの、でかぶつ君？　玉がどうかしたの？」
アンナがからかうように言った。

グレンはベッドに仰向けになったまま、アンナにその肉の球を弄ばれるままだった。アンナは両手で楽しげに、巨大な睾丸をひねりあげたり、絞ったり、握りしめたりした。
グレンは困惑していたが、自分の三分の一の体重しかない少女に、睾丸を完全に潰されるとは思っていないようであった。事実、彼は、どこか、それを楽しんでいるような雰囲気すらあった。
アンナはしだいに焦って、なんとか睾丸をひねり潰そうと悪戦苦闘しはじめすらしていた。
そのとき、絶叫が響いた。これまで聞いたこともないようなすさまじい絶叫だった。
アンナが悲鳴をあげているのだ。
グレンが彼女のプッシーからその巨大なペニスを引き抜き、アナルに突っ込んだのだ。

他の部屋から出席者たちが、何事かと駆け込んできた。
グレンは、いまや彼の太い肉棒をアンナのピンク色の穴に深く挿入していた。
アンナは苦しげに顔をゆがめ、悶え、もがき苦しんでいた。なんとかこの責め苦から逃れようと、何度も何度も、グレンの睾丸に拳を打ち下ろしていた。

だが、無駄だった。グレンは、彼女の腰を両手でつかみ、動けないように固定した。
グレンのペニスは、その半ばをすでにアンナの体内に埋め込んでいた。アンナはまるで、ベースボールのバットをお尻につっこまれたようにパニックに陥っていた。
アンナの拳がグレンの睾丸に打ち込まれる度に、グレンはのけぞって痙攣し、そのためにペニスはさらに深く挿入されるのだ。まさに悪循環だった。
だがしかし、これを見るものにとっては、なかなかの見せ物だった。すでにベッドルームはほとんどの出席者で埋まっていた。
何人かの男は自分の睾丸をつかんでみせ、はやし立てられていた。

アンナは必死に身をよじり、なんとか両手で、グレンの左の睾丸をつかんだ。十本の指でしっかりと睾丸を逃さぬように包み込み、親指を深くのめりこませた。
グレンは激しく痙攣し、身をのけぞらせ、苦痛に悶絶した。
野次馬たちはますます興奮した。アンナに声援を送る者もいたし、グレンを応援する者もいた。
グレンは必死になって、アンナの腰を引っ張ってさらに深く挿入した。苦痛は苦痛を呼んだ。
アンナは涙を目に溢れさせながら、なおも睾丸にこめた力を増しつづけた。グレンは大きく口を開け、野獣のように咆哮しながら力を振り絞った。
そのとき、ぐしゃっと嫌な音が響いた。

グレンの左の睾丸が完全に粉砕されたのだ。
同時に、グレンのペニスが完全にアンナのアナルに没入した。
アンナは悲鳴をあげ、そして失神した。彼女は、アナルにペニスを挿入されたまま、ぐったりと仰向けに倒れ、動かなくなった。彼女のプッシーが、野次馬たちに大きく公開された。

彼女のプッシーから愛液が吹き出し、グレンの玉袋にしたたり落ちていた。
驚くべき事に、グレンは、睾丸を潰された激痛に半ば意識を失いつつも、腰を動かし、アンナのアナルを犯し続けていた。
野次馬たちの興奮は絶頂に達した。大きく開かれたアンナの脚と脚の間で、信じがたいほど巨大なペニスが引き裂かれた穴から出たり入ったりしているのだ。
「入れろ！　入れろ！　入れろ！」
拍子をとるような歓声と拍手が沸き起こりベッドルーム全体を熱気が渦巻いた。
数分後、グレンはついに射精し、その瞬間、潰された左の睾丸に激痛が走ったのだろう、大きく痙攣し、顔面蒼白となって失神した。
アンナとグレンはつながったまま、ぴくりとも動かなくなった。

翌朝、グレンは目を覚まし、柔らかくなったペニスをアンナのアナルから引き抜いた。大量の

精液が詮を開けられたアナルからこぼれ落ちた。
彼は服を着ると、苦痛の呻きをもらしながら部屋を去った。

アンナは、グレンが去ると同時に起き上がり、ベッドに座り込んだ。
うつろな目で虚空に視線を漂わせながら、彼女はこう呟いた。
「もう一個……残ってるもんね」